

皆様、お変わりなくお過ごしですか？ 今年もシーズン中、太陽熱温水器が大活躍してくれて、11月半ばを過ぎてても、バックアップ用石油給湯器にはこの5月に入れた灯油がまだ残っています。この分だと11月末か12月初めまで灯油の購入をしなくて済みそうです。

さて私はこの秋、遠い所に旅をしてきました。今日はそのお話です。

私は長年英語講師をしていたので、職業柄英語圏へは何度も出かけていました。異文化間コミュニケーションの実地訓練や、実際に英語を使って自分の英語力を維持（出来れば向上？）する機会が必要だったからです。そんなわけでアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに何度か出かけていました。ここ15年ほどはいつしかエコビレッジや持続可能性に向けた居住地や生活のデザイン事例を視察・見学する旅になり、暮らし方のヒントを多く得ました。でも、西洋先進国の英語圏への旅に偏りがちで、「別の世界」を体験したいと思っていました。そこで還暦を過ぎた今、まだ体力のあるうちに遠いところに行っておこう、と決めたのです。

そんな思いで今回選んだのが、北アフリカのモロッコです。計画を自分で立てひとり旅をする従来の私の旅のスタイルは、今回あきらめました。公用語のアラビア語もベルベル語も私は知らないし、常用されているフランス語も挨拶程度しかできないからです。加えてイスラム文化には不慣れで、思わぬ失敗をする可能性があり、今回は小さな旅行社の小人数ツアーに参加することにしました。そして持続可能性の視点より、砂漠気候帯や旧市街地の住居や生活風景、イスラム教の影響を受けた生活文化などをかいま見たいと思いました。

カサブランカ空港から、フェズ、メルズーガ、トドラ溪谷、ワルサザード、そしてアトラス山脈のティシュカ峠（標高 2,260m）を超えてマラケシュを訪れました。小さなマイクロバスの車中では、運転手さんも日本語ガイドさんも熱心なイスラム教徒なので、コーランがCDでよく流れていました。（なかなかの美声...）モロッコの住居は日干しレンガで、地元の土で作られています。一部に白とブルーの美しい街並の地域があるものの、今回私が訪れた地域の家はほぼ「アースカラー」。



写真①

（写真①はワルサザードのホテルより。手前は植物が使われた屋根）車中より住人が退去して廃墟となった家屋を何度か見ましたが、崩れ落ちて土になり自然に戻るのです。まさに風土に根ざした昔からの自然住宅のお手本と言えるでしょう。砂漠地帯の村メルズーガでは先住民ベルベル人家庭を訪問し、住居内部を案内していただきました。暑い日でしたが、日干しレンガの厚い壁のお陰で家の中は涼しく快適でした。（写真②はその近所で建設中の同様な家）



写真②

ラクダに2時間ほど乗って、サハラ砂漠の中のベルベル式のテントに移動し、砂漠に1泊する体験もしました。（写真③がそのテント。見えないが小さな太陽光パネルがある。）

夕食に手作りのタジン料理をいただき、食後は現地の人達と、私たち以外の外国人観光客も加わって、歌ったり踊ったり笑ったりの楽しい交流タイムでした。就寝時、私はガイドさんに了解をとって、狭いテントから防寒用毛布を持って抜け出し、満天の銀河を眺めながら砂丘の上で眠りました。翌朝は夜明けの4時頃目覚めて、砂漠の日の出を見ました。



写真③

旅の途中、車中より広大な乾燥した礫状の土地が果てしなく続いているのを目にして、太陽光発電パネル設置に最適の場所だと思いました。帰国後、モロッコ王国大使館のHPで調べた所、この国の主なエネルギー資源は石油（石炭も少し）とのこと。エネルギー消費量の85%以上を輸入に依存していて、再生可能エネルギーはまだごくわずかです。

寒さに向う季節、皆様ご自愛ください。

2013年11月17日 アースガーデン 植月千砂

追伸：皆様にご心配をかけていましたが、アースガーデン東側に大型バスが通れる道路ができてしまいました。酒造工場の建設も間もなく始まることでしょう。それまでにアースガーデンと道路の間に板塀を建設していただけるようお願いしました。